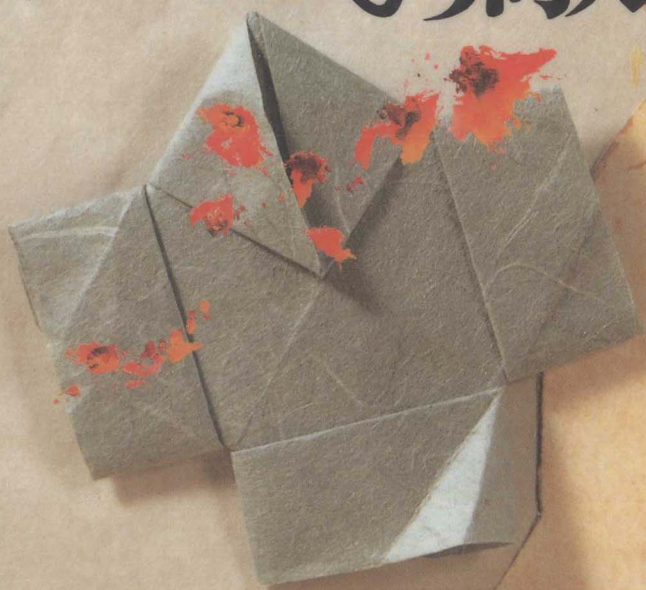


多岐川 恭

かたき
江戸の敵



多岐川 恭

江戸の敵

かたき

光風社出版

江戸の敵

著者 多岐川 恭

発行者 深見 兵 吉

発行所 光風社出版

東京都文京区春日二一四一

郵便番号 一一二

電話番号 〇三(五八〇〇)四四五

FAX 〇三(五八〇〇)四四五二

印刷 大盛印 刷

製本 越後堂製本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えます
定価及び発行日はカバーに明記して
あります

© Kyo TAKIGAWA 1994

Printed in Japan

ISBN4-87519-377-7

江戸の敵
目次

餌屋の客人

七

忘れていた女

元

雨宿り

五

おびき出し

三

岡っ引無頼

二七

寝ものがたり

二七

生き返った男

二四

身がわり

一五

江戸の敵

二〇

三河屋

二四

斬また斬

二五

装幀
石川
勝

江戸 の 敵_{かたき}

餌屋の客人

一

松の木の根元に、若い女がうずくまっていた。白い手拭いを頭からかぶっている。道から少し入ったところに女はいて、一帯は広い松林である。地面には春の陽が斑まだらに射している。

庄作は通りがかりにその女を見た。こんなところで何をしているのかと不審だったからだが、女は庄作に目を向けるでもなく、ぼんやりと考えごとでもしている様子だ。

庄作はそのまま行き過ぎ、しばらくしてから引返してきた。側へ近付くと、女はじめて庄作を見た。ちよつと身を固くしたようだ。

「姐さん、どうかしたのかい？ 工合でも悪いかえ？ 気になって立ち戻ったんだが」
と、庄作は相手をおびえさせないように、笑顔を作つて問いかけた。女はしばらく返事をしな

かったが、ようやく、

「くたびれて……」

と言った。

「くたびれた……と、姐さんはこの辺の人じゃないね。それじゃあ、腹を空かしているんじゃないかねかい？」

女はわずかに笑った。

「一歩も動けない。旦那、厚かましいけれど、なにか食べものでもあつたら、少し恵んでくださいませんか」

「やっぱりそうかい。お安いご用さ。その代り、冷飯の残りで、お菜は沢庵だ。それでよけりやあ付いておいで。家はつい近くだから。まあ、家とも言われねえしろものだが」

「恩に着ます、旦那」

「旦那は止しねえな、尻こそばゆくなる。この身なりを見りやあわかるだろう」

女は立上って、かぶっていた手拭いを取った。美しい顔である。くつきりと形のいい眉、よく張って澄んだ瞳、通った鼻筋、やや大きめで、ふっくらした唇。化粧つ気はないが、十分に人目を引く。

庄作は先に立って歩き出し、女はすぐ追付いて並んだ。上背もあり、庄作とあまり違わない。「妙なめぐり合わせさね。もう大分昔になるが、いまお前さんが坐っていたところに、わたしが坐っていたんだよ。やっぱり腹を空かせてねえ。それで、お前さんを見てピンと来たのさ」

「本当に？ 珍らしいこともあるもんですね。どうしてまた……」

「わたしは生れは江戸だが、食い詰めてねえ。ずっと先へ行くつもりだったが、ここで動けなくなった。そして、善六というお爺さんに助けられて、家へ連れて行ってもらった。これからお前さんを連れて行こうとしているのが、そこだよ。しがねえ餌屋さ」

「餌屋？」

「うん。魚釣りの餌。この辺は川釣りも海釣りもできるからね。川はみみずだの、いろいろな虫、海はゴカイ、小エビ、貝のむき身とさまざまだ。買いくるのは子供が多い。竿も置いているが、これも子供に売る安物さ。善六爺さんの店だったのさ。爺さんは死んじまって、わたしがあとを嗣いだ。身寄りのねえ人だったよ。わたしも同様、身寄りが無い。だがそれだけに、食いつなぐには、餌屋で十分なのさ」

歩いて行く左の方が、一面の浜辺になった。中川の河口と、海である。

「わたしはおくみと申します。こんなところへ流れてきたわけは」

「わけがあるのはわかつているが、聞くには及ばねえよ、おくみさん。人間はいろんな目に遭うものさ。わたしの名は庄作。……もうじきだ」

河口から右へ折れた浜辺に、庄作の餌屋がある。うしろが雑木の生えた山で、その崖下にある。家とは呼べないほど、みすばらしくちっぽけなもので、かや葺き屋根に朽ちかけた板羽目である。間口一間足らずの店に、餌箱やちよつとした釣道具が置いてあるほか、アサリやシジミを売っている。これは子供が取ってきたのを庄作が買上げるのだ。軒に粗末な釣竿が何本か立てかけてあ

る。

店の奥が部屋で、部屋はそれだけしかない。煮たきは裏口です。井戸があつて助かっているが、なかったら、こんな辺鄙な浜辺で暮してはゆけないはずだ。

裏庭には庄作がささやかな畑を作っている。何を作っているのか、おくみにはわからないが、とにかく青い葉っぱが伸びていた。

女のおくみに不便なのは後架で、屋根はあるが、囲りを覆うものは何もない。

おくみが立ちすくむようにしていると、庄作は笑つてだれも見る者はありませんと言つたが、困るならゴザで囲いをしてやろうと言ひ直した。

「わざわざそんなことをしてもらつちゃあ」

「別に手間はかからねえさ。どうやらお前さんは、しばらくここで暮すことになりそうだからね」
「そんなつもりは……」

「あろうがなかるうが、行く宛てがありやあ別、ないんだらう。あわてて出て行くこともないさ。のんびりと腰を据えるがいい」

おくみは店の前へ出てみた。浪打際はそれほど近くなく、白い砂浜が広がっている。左手に岩場があり、しぶきを散らしている。

「あの岩場でよく釣りをしているが、きょうはだれもいねえな」
と庄作が言つた。

「家が一つも見当りませんねえ、庄作さん」

「浜伝いに、ずっと先へ行きやああるがね。それも漁師の家が一軒、二軒と間遠さ。お尋ね者がひそむにはいい所だ。さて、飯の支度をしよう」

「相済みません。……あれ、あののぼりはなんですか？」

いままで気が付かなかったが、家の横つちに高い竿が一本立っていて、その先に白い吹流しが付いている。

「あれかい？ 風の向きや強さを見るのさ。風の動きで魚の釣れ具合が変わるもんだと、爺さんが言っていたよ。わたしは釣りをやらないから、そんなものかと思うだけだね」

おくみはようやく飯にありついた。冷飯と沢庵は庄作の言葉通りだが、そのほかに豆腐が付いた。

中川沿いにずっとさかのぼると、船改めの御番所があるが、それよりさらに五町ほど先に、諸式を商う店があり、日用の品を売っている。豆腐やこんにゃく、沢庵の類も置いてあって、庄作はそこに出掛け、豆腐を買って帰りがけに、おくみと出会ったのだ。

湯は角火鉢の鉄瓶にわいている。茶はちょうど切れていたが、胃の腑が満ちたあとの白湯さかは、おくみにはこの上ない甘露だったようだ。

「本当に、生き返ったようだ。助かりました」

とおくみは改めて礼を言った。

「このまま、しばらくご厄介になっていいんでしょうか」

「こっちは構わないよ。話し相手ができて、ありがたいくらいのもんだ」

「立入ったことを聞くようだけれど、おかみさんは？」

「いないよ。昔はいたが、別れたきりだ。以来独り身で、この先女を置く気もねえな。わずらわしい」

「それでも寂しいでしょうに」

「慣れたからね」

「庄作さん、お年は？」

「いくつに見えるね？ 大分じじむさくなっちゃあいるが、四十二の厄が去年さ」

髪結床がよほど遠くで、行くのが面倒なのか、庄作の髪は乱れ放題、さかやきの毛が伸び、びんの下から顎、鼻の下にかけて、不精ひげだらけだった。顔は陽焼けで赤銅色だ。だがよく見ると、目鼻立ちは整っている。

「わたしは二十四。うかうかしているうちに、そんな年になっちゃまって」

「うかうかと言うが、大分男を泣かせた顔だねえ」

と庄作は笑った。

「男に泣かされもしましたさ。お前さんにかくすこともないから、退屈凌ぎに聞いておくんなさいな」

両国の水茶屋に出ていたが、横山町の革細工屋の若旦那に見初められ、嫁入りして、大した出世と困りからうらやましがられたのはいいが、そのうちに大旦那の素振りがおかしくなり、ひそかにおくみに言い寄り始めた。最初は笑って受け流していたが、大旦那の執心は募る一方で、女

房や若旦那の目を盗んでは、力づくで迫ってくる。

若旦那も女房も留守だったある晩、危うく犯されそうになり、その場はなんとか逃れたが、以後は万一のためにと、鉄をふところに入れておくことにした。

その次に抱きすくめられた時、もみ合ううちに夢中で鉄を大旦那の脇腹に突き立ててしまった。大した怪我でもなかったが、大旦那は可愛さ余って憎さ百倍のことわざ通り、おくみを出入りの岡っ引に引渡してしまった。おくみは盗み癖があり、夜中に自分の寝間に忍び入ったところを見付けられて……と岡っ引には話している。若旦那は父親に頭が上らない男で、おくみを助けるために、指一本動かそうとしなかった。

おくみを捕えた岡っ引が悪者で、獄門、はりつけにもなるところを見逃してやるからと脅され、否も応もなく肌身を奪われてしまった。岡っ引の自由にされて半年、寢床で前後不覚の岡っ引の頭を薪ざつぼうで叩き割り、着のみ着のまま逃げ出した。岡っ引は大怪我か、それとも死んだのか、わからない。

深川に昔の朋輩が住んでいて、古道具屋の女房になっているが、そこに転がりこみ、十日ほどかくれていたが、いつまでもそうしてもいられず、探索の手が及んできそうな気配もあるので、木更津の親類の家に行くと言って出た。親類などありはしない。出たのがけさのことだった。だが、ともかくも木更津辺りへ行行って奉公の口でも探そうと思っていたのだが、あの松林で足が進まなくなった。

おくみの話はそういうものだ。

「両国の水茶屋かい。道理でお前さんは渋皮がむけて、いきだ。おまけにその美しさだから、革細工屋の若旦那がほれて通ったのも無理はない。大旦那の執心もよくわかる」

庄作はおかしさをこらえたような顔で、そう言った。

「追われている身なんです。それでも置いてくれますか」

「安心するがいい。かくまってあげるよ」

「この辺りにも、岡っ引や手先が回ってくるんでしようね」

「たまにはくる。いつ来てもなんにもねえから、茶飲み話でもして帰るがね。顔見知りで、藤吉という十手持ちだが、もう年寄りだから、隠居仕事のようなものさ。もしやってきたら、お前さんはわたしの姪ってことにしておこう。夫婦喧嘩をしてうちを飛出したってね」

庄作は楽しそうに言った。

「おじさんは本当に、地獄に仏だよ。助かった……」

おくみは膝を崩して溜息をついた。

「お前さんの着ているものは、ちよいと粗末で借着のようだね。それに比べて、柾目の桐下駄は上物だ。着物を取っ替えたのかえ？」

おくみは美しい目を見張るようにした。